



「おいしい生活」“SMALL TIME CROOKS” ●●●第6回

“It's a cookie store
but we're making dough.”

「クッキー屋で金作りだって？」

ウッディ・アレンの最新作、ニューヨーク式“夫婦漫才”は、スノッパなギャグが満載。日本語に置き換えにくい言葉遊びや、カルチュアの知識を詰め込んだら、いざ笑わん。

文=中野香織



スティーブン・スピルバーグ率いるドリームワークス配給。全米で大ヒット、フランスでも興行成績第1位。9月から恵比寿ガーデンシネマ他全国順次ロードショー

『ギター弾きの恋』の余韻もさめやらぬというのに、もう新作がやってきました。ウッディ・アレンの31作目の映画、『おいしい生活』です。

原題は'Small Time Crooks'、[落ちこぼれのコン泥たち]というほどの意味でしょうか。落ちこぼれ犯罪者の夫レイ（ウッディ・アレン）と、口達者なその妻フレンチー（トレーシー・ウルマン）という結婚25年目の夫婦をめぐるコメディです。

銀行の2軒となりの空き家を買取り、仲間と共に金庫へ通じる地下道を掘るといふ大バクチを始めたレイですが、カムフラージュとして始めたフレンチーのクッキー屋のほうが大繁盛してしまうという番狂わせが起こります。夫婦は長年夢見た大富豪の仲間入りをするのですが……。

アレン映画の常とも言えますが、この映画のセリフには、日本語に置き換えにくい言葉遊びや、出てくる固有名詞にまつわる知識があってはじめて笑えるスノッパなギャグが満載です。

そもそも、「クッキー作りによって大金を作る」という発想からして、言葉遊びから生まれたものではないかと思われるくらい。'dough'という英語ですが、この単語は「クッキーの生地」という意味のほかに、俗語で「お金」という意味をもちます。フレンチーとレイの次の「夫婦漫才」は、この2つの意味を押さえてこそ、笑える会話になります。

Frenchy: We'd have done better just
with a cookie store.

We're making good dough.

「クッキー屋で十分よ。生地作り（ドー）を手伝って」

Ray: Making good dough. It's a
cookie store but we're making dough.

「クッキー屋で金作り（ドー）だって？」

It's a cookie store. We're making...!

「笑えるジョークだ」

Frenchy: I get it. I get it.

「分かったわよ」

知っておくにこしたことはないのは、英語だけじゃない。『ピグマリオン』や『ドリアン・グレイ』などの古典文学、ウィンザー公やヘンリー・ジェームズという人物の伝記的背景、シャトー・マルゴというワインやアスペンというスキー・リゾートがもつ意味、ルイ・ヴィトンやヴェルサーチというブランドの上流社交界における位置づけ……と実に多分野にわたる「カルチュア」に関して、いづれ知識があったほうが、この映画の笑いを堪能できます。アレン映画が「観客を選ぶ」と評されることが多いのは、次々と飛び出してくるこんな固有名詞に反応するアンテナがないと、映画を見てもおいてけぼりを食らったような気にさせられることがあるからでしょうか。まあ、ヴェルサーチ（のフェイク）の衣裳は、それと知らなくてもビジュアルの迫力だけで笑えますが。

さて、そのヴェルサーチをとっかえひっかえできる身分になった二人は、上流社交人士の仲間入りをするべく、自宅でパーティーを開きます。が、成り金趣味まるだしの二人は客人に陰口をたたかれる羽目に。それを聞いてしまったフレンチー、決定的な「真実」に目覚めます。

Class is something you can't fake
and you can't buy.

「品格はお金じゃ買えないわ」

ああ、とりつくりょうことも金で買うこともできない、品格。これを得るには、教養だわ。というわけで、発奮したフレンチーはイギリス人の画商、デビッドに自分たちを「教育」してくれるよう依頼します。一方、おカルチュアよりパンツードでビールがいいレイのほうは、デビッドに対してこんな疑惑の目を向けます。

I get a bad vibe about this guy, David.
It's my street instinct, but I just don't

trust him.

「デビッドはうさん臭い奴だ。本能以ピンとくる。信用できない」

「悪い波動 (bad vibe) を出している」デビッドを演じているのが、なんとヒュー・グラント。誠実そうでハンサムな外見の裏には別の真実の顔がある、というドリアン・グレイ的な役割に、コミカルにはまっています。

そんなデビッドでも、気分はすっかりドラマティック・ヒロインのフレンチーにとっては、花売り娘をレディに変身させたヒギンズ教授や、階級差や世間体という障害を乗り越えて愛を成就させたウィンザー公とだぶって見える。ゆえに意味深長な贈り物をします。けた外れに高価であろうと、かまわない。

It's in appreciation of all the stuff
you've been doing for me.

「指導してくれたお礼よ」

恐縮する（フリをする）デビッドを、フレンチー、とどめのセリフで挑発します。

Can I be frank, David?

Sometimes I think I've outgrown him.

「正直に言うわ。私は夫を卒業したのよ」

努力やりすぎ (overdo) のフレンチーが努力やらなさすぎ (underdo) のレイをほんとうに「卒業」するのかわかれたその時、バブリーな生活の崩壊。その後はウェル・メイド・コメディの王道をいくような無難な展開で、あれ?と思いきや、この映画はスピルバーグ率いるドリームワークスの配給だったんですね。大衆受けするアート系映画。ポピュラー路線のスノビズム。言語矛盾のようなこんなテイストをさらりと打ち出してしまえるのも、またアレンの品格でしょうか。